



おくのかるね

5  
4687  
特



門八五  
4687  
卷

夫天地者萬物之逆流光

陰者百代之過客

春夜宴桃李園序  
李太白古文後集

文選古詩  
青台陵上柏原々洞中  
石人生天地間忽如  
遠客

狂律  
落日邊雙鳥  
晴天卷片雲  
走離東北風塵際  
浮泊西南天地間  
彭仲  
海濱



夫天地者萬物之逆流光  
陰者百代之過客

春夜宴桃李園序  
李太白古文後集

文選古詩  
青台陵上柏原々洞中  
石人生天地間忽如  
遠客

狂律  
落日邊雙鳥  
晴天卷片雲  
走離東北風塵際  
浮泊西南天地間  
彭仲  
海濱

流寓之兒  
海濱

昭示十八年  
三月二日  
少田壽吉氏  
長男友太郎  
氏實賜  
田中

居人自解東西書籤

華果農封殊細

幸佳

なれりてさしたるもの

ゆたのふ

おのりかたのた

のうまのしつらん

おのりかたのた

白川の雲のあまの

花三経曰人初生時三

同時而生三神名俱生神

花をじんのいうて

けんかしてさす

おのりかたのた

君子居無未安

花三経曰人初生時三

同時而生三神名俱生神

花をじんのいうて

けんかしてさす

おのりかたのた

白川の雲のあまの

花三経曰人初生時三

同時而生三神名俱生神

花をじんのいうて

けんかしてさす

おのりかたのた

白川の雲のあまの

花三経曰人初生時三

同時而生三神名俱生神

花をじんのいうて

けんかしてさす

おのりかたのた

白川の雲のあまの

破屋くしの古葉を

やきしそら

白川の園こん

神の物

しんあひて

引の破をつり

しんあひて

いりて

別野く

早野戸

面か

木の七口

を切

不二の

ふの

き

き

き

き

き

き

源川

神の物

玉の

阿彌陀

阿彌陀

源

日

市川文粹

前途程遠馳思於  
鴈山之暮雲

辭家遠行游  
悠遊三千里

魂魄曾夢不入  
金光明經曰

心如幻化

あはれなるおのれが  
あはれなるおのれが

感時花濺淚恨別  
身整

尚海中有較人室  
水居如魚不磨機

織具眼能泣則  
出珠

整身映天馬首  
三維

眼射波紅

祖反車北  
行脚者謂遠離御曲

行脚天下晚情指累  
尋訪師友末法澄

語也所以學無常  
師偏歷方尚

竺童吳天雪香輕  
楚地花

人生不再好髮髮  
白城錄杜

百髮五五  
あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

あはれなるおのれが

イセ集  
阿の多記世故中町の  
御を袖の人等別れ  
なり

ふとちうはつとふ子つる  
流きゆく雨具も筆のま  
あはらふりしとて  
さしゆくあかしくて  
あはらふりしとて

詞を果  
いそぎそひあり  
まはらふ  
下地や室のハ  
まはらふ

家のハ  
神ハ  
富土一精也  
ちういのみ中  
せれのり

仙のいんりる  
いそぎそひあり  
まはらふ  
下地や室のハ  
まはらふ

此の目光  
云々  
和州  
和州





皇太子様  
何れ此の御心  
西行

御心  
うまわれ  
御心  
めれ

何れ此の御心  
皇太子様  
白

利根  
皇太子様

皇太子様  
芭蕉の下  
薪水  
ねーよ

け  
た  
つ

吉  
た  
う  
ち  
て  
ん  
の  
地

皇太子様  
芭蕉  
薪水  
ねーよ  
皇太子様  
芭蕉  
薪水  
ねーよ

皇太子様

ひろり入て滝の裏より北  
らみの麓とト付し付ら也

暫時の海と御らや夏の物

○安居二前中後三位百無四月十日入七月十日夏九月内  
飛瀬のつちをれとらあし知人あし

そよりおとさしとてあつと  
ゆえとすうとて一村をんし  
りよ雨降日さるれ農まの家  
よ一敷をらりてゆれい又路中

まかりとて予のうらみ  
まがみあつとふけとれハ路ま  
といともしとてはなれ  
いしすしとやとれとけ路ハ横  
とわなれしうとてあつ人の  
ふとましとあやとて水は  
のこさる所とてとみし  
り一はらといとまき者あつと



任まらぬしこころは村の小姫にて  
くまをかくれぬとせうれぬふゆ  
やうしうらたねえ

うはねとハハき格子の名をくー さざ  
彼イネキアテキヤコトウハハキヤ

おて人里よむれハあしんを新  
つらしおをそしととととと

一黒羽の館代降坊ちアノ一のま  
まう伝ふさひうきぬあしーの伝ひ

田舎後つろく共才桃おまろ

えう期々おとあし自のたつ  
と付いて親属のまうしあね

うしおをぬきとくしりい都か  
住子白道逸ハ天遊又云遠見無当理

よ遠道して大進おの伝と一見し  
那頃の藤原をちりてお藤のまの

古墳をさうれよの八幡宮う借

上市廟の的を射しあつるし

武上のまをこつろよ  
ハハの上よまをたす  
ちひめこころ



改文抄  
 生死巨閻無佛  
 長鎖  
 張若川四外  
 懶積和尚隱居  
 衡山石室中

とつやくあるき〜  
 あり〜ね板〜  
 月のも今程〜  
 橋〜  
 して〜  
 山〜  
 窟〜  
 け〜

木啄も〜  
 と〜  
 そ〜  
 る〜  
 け〜  
 ら〜

教〜  
 教〜

此は上中下部云  
 可なり約りもりて

有る義は十卷の石



秋と又...  
五...  
川...  
み...  
...  
...

千...  
又...  
...  
...  
...

有...  
在...  
是...  
之...  
大...  
中...

何れ也卯の糸の...  
糸の...  
...  
...

改...  
...  
...

卯の糸を...  
...

川を...  
...

子石城 桐馬 三春の庄...

の...  
...

ま...  
...

新...  
...

と...  
...

先...  
...

同...  
...

風...  
...

陽...  
...





とありし由り佐藤左司の日記に  
たのら御一とすしりよなる飯塚の里  
強陣とすまをらくりよぬとす  
しりあわらりもたす日、旧館也林  
よ大手のたると人のあなゆらよす  
て間をさるしみるころのたを  
つふの石碑をおう中とし二人の  
塚ふとらしし先んれ也かるとれも

音出 羊祐傳

羊祐守、襄陽、卒、可性  
多、建、碑、望、者、莫、不、流

流、名、墮、淚、碑

岷山臨漢江水流沙如雪

上有墮淚碑昔昔久磨滅

ういしくさくらの世うやえつらぬ  
らと流をわくくぬ、漢漢の石碑  
とさきこころあつすちよ入し大  
をんハ、さよハ、我、經、の、太、刀、奇、を、  
ら、い、な、と、と、し、り、く、什、物、と、す

五月朔日連綿の吟、通、ありや

知、百、貫、昔、通、る

る、五、月、朔、日、の、こゝ、也、と、お、飯、塚、と、い、  
る、温、泉、わ、れ、ん、湯、よ、入、し、客、を、ら



お  
もろの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

異 五怪

おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

お  
おの夕まゝなり

論語  
子曰克己復禮為仁

注仁者本心之全體  
己者謂身之私欲

願作心師不師於心

夫不  
復有克己之師と云  
やんぬるもよき人の  
の力をすませし

計は日くしつと云は  
ひし中身の美と云は  
これに其の旨ありと  
云ふは  
朽ちぬるを云ふと  
云ふは其の旨ありと  
云ふは

外古  
五石の石り人の  
こつてしたる  
あつた五月の月

是は修の那く入まはる中ね実月  
の塚はいつくの  
えとちりる  
の里とちりる  
の結くくんの  
比の五月の月  
芳くはる  
さくくくく  
く

東方の  
の

是

泥潭  
の

か  
い

のねくくく  
五月の月  
志法  
武隈の  
根ハ土  
の  
は師  
下りし人



北の多け玉の核の中  
あせの花は

みすくひとささ  
あせ 玉の核の中  
あせの花は

あやの草は子月  
あやの草は子月の  
あやの草は子月の

七あるは君を好きて  
とよみ我は人

あひて秋のききごんや  
あひて秋のききごんや  
あひて秋のききごんや

玉田よと 藤  
玉田よと 藤  
玉田よと 藤

入て空をまの下のとさうさ  
入て空をまの下のとさうさ  
入て空をまの下のとさうさ

うくあゆげきハ集とさうさ  
うくあゆげきハ集とさうさ  
うくあゆげきハ集とさうさ

とさうさハ集とさうさ  
とさうさハ集とさうさ  
とさうさハ集とさうさ

のいねとあけさうさ  
のいねとあけさうさ  
のいねとあけさうさ

松崎のうさのあけさうさ  
松崎のうさのあけさうさ  
松崎のうさのあけさうさ

思得のほねつけさ草鞋  
思得のほねつけさ草鞋  
思得のほねつけさ草鞋

あやの草は子月  
あやの草は子月の  
あやの草は子月の

あやの草は子月  
あやの草は子月の  
あやの草は子月の

あやの草は子月  
あやの草は子月の  
あやの草は子月の

とよみ我は人  
とよみ我は人  
とよみ我は人



を園ハ親すり船の一徳ある余の  
吸し蕪旅の芳をちけれこ  
洞も落らるる也

くれり野田の玉川伴の石をるる也  
ハタチ馬園政と名古言る有  
ハタチ末松山の近藤村云  
石三百

末乃松山ハ石を道て末松を以て  
元ノ山中ノ山ナキ有 松林ニツキタル海原ノ遠山トリ 奥ノ妙ニ要シ

松のありく皆葉りくくくくくを  
比留連理ヨシ

うりけをくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

新石  
別れは風して  
陸奥の甲田の志村  
子多るなる  
比留連理ヨシ  
君をわすれし  
我より末の松山  
之をん

くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
わすれし

みちのくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく

漁舟色を流丸舞大子  
夕々しきふさふさの花  
ほゆる注 河出抄  
宮城よふくはて  
川ありけさるる

寂しく  
野山  
（比留連理）

原正橋巻ひりいりり一江江注美：国日本記首上

部一字ヲ

もあしひるいさくら洞子くら  
とて枕らうういさくらとと  
うふささの遺風とれさあ  
しみほしとらりる洞子くら  
の以神し信國守五真とれ  
て宮位やしく彩椽とらりや  
うし石の階ぬ奴しきり洞日あ  
るの玉とらりしやうとらりるの

或曰能國云北云此宮は四村將軍村女夫時丑万八千人ノ兵精ヲ收メん室ニ

四ノ序記  
太敷

たふまきりあつた

數多ヲ云 又孔安國云ハ尺曰奴

駐車坐也楓林晚 杜枚  
新古 雅俗何事火たるや  
石くくてもるる  
袖の三つさるる

果七聖土の境とて神靈あり  
うしとらりるの風俗とらり  
いし貴くれ神ありあつた  
うれらのうらりの向し文治三年和泉  
こころ奇進とらり五つとらり  
今月のさしとらり  
うし楽ハ身義忠孝の士也佳令  
今よむのそとらりしあつた

大袋ヲ枕宮上ト云故ニヤ

一書見ル神ノ立灯籠ト

伊世物ニみらぬとらりる  
白くはらりる

名ノ誤字カ

白民  
竟門原上土  
埋骨不理名

勝三國亭  
襟三江而帶  
五湖

俄人水道を勢を争ふ

名又隨之 佛道之進退解出

午よららば

其同一里除雄雉の如く

折よあめり

一の如風

東南あり海を

浙江の湖を

あつて歌の天を

ちほよ甫富

三重よ

あら肩あり

ねの

汝風よ

きあ

くして美人の顔

山海經淮南子

同改テ諸奈ス

風正ノ下略 後漢書

大明一統志

ハ三江中 洞庭五湖

二句討後集

ハ詩、鮑有苦葉

宵 字イニ深目

非ト後集

杜詩

西嶽峻嶒 竦處尊  
諸峯羅立 似兎孫

陸子孫の冬

往まの

莊子 自然 難言哉

而不着心自開 桃花

流水宵然 去別有天



四大全 許謹曰

天地言其形造化言其理造化理妙不可見唯見其成敗之迹耳

蒙引云

天地功用即造化迹也造化指天地之作爲而言造化者自無而有化自有而死

成

性成

造化又七言造化松濤や雄濤の聲やあみちあみち

大山祇方出河

神のむし〜大とすまのふもるわと

うや造化の天工いつまの人々

とふらむ訂と置と

雄濤の破ハ地〜海をむら

流也雲を揮師のふ雲の流

明鏡石る〜將ねの本流

世といふ人〜帰く〜

落穂ね〜あつ〜

卷同〜修の〜い〜人〜

と〜れ〜さ〜ら〜く〜ま〜の

か〜し〜月海〜う〜つ〜り〜て〜登〜る〜あ

又〜あ〜き〜じ〜江〜さ〜し〜ゆ〜り〜て〜空〜を

ゆ〜れ〜ハ〜空〜を〜ひ〜く〜二階〜を〜修〜て

風雲の中〜と〜流〜ら〜存〜す〜ら〜ん

あ〜や〜し〜ま〜ま〜て〜あ〜ら〜む〜心〜は〜せ〜ら〜れ

松濤や〜流〜ら〜れ〜ふ〜す

若島遊

始成王

橋就渡海日門封

浙江湖桂月月中

落天香雲外飄

はた

改付

柳の多と橋のむに白

そ柳の枝とまをさ

松濤や成られや〜

古今集の山は巴れ赤人とふ人〜

松濤や流られ〜

子曰野而藏之

田子方曰仲尼見之而不言

子路曰吾子欲見温伯雪

也仲尼曰若夫人者目

擊而道存美亦不可

以容也

偈頌

遠上徑山弄風光

却來回福啓道場

覺此法身無一物

元是眞壁平四郎

一偈卷中ノ要文ナシ

予ハ...

...

...

...

...

...

十一日瑞岩...

世の昔...

入る御網の及用...

雲吾禪師の法化...

夢はりて金壁...

仏土成就の大伽...

彼見仏聖の...

十二日平初水...

...

一雄志葛菫...

雄志深志王下...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

神皇のあひれきの人  
いそぎのつとよいこと  
いそぎを  
石の巻といふ  
神のあひ

石の巻といふ  
神のあひ  
いそぎを  
いそぎを  
いそぎを

とらわらう路少ききし  
石の巻といふ 漆よおこらぬ  
とらわらう 金花と海と  
見わら 數百の廻入り  
ひ人及地をいそぎて  
煙をてききわらひ  
下よもまねる  
こらもわらう人

中世の作  
いそぎ  
神の子とせらる

金言通原路

神皇のあひれきの人  
いそぎのつとよいこと  
いそぎを  
石の巻といふ  
神のあひ

小室と一おをいそぎ  
ふそねたささみり神のあひ  
尾ゆらの物よめ  
まきもほよふて戸伊  
一室して早泉と  
余里らららららら  
三代の業耀一膳の中

大門の北一里、  
 うねの北一里、  
 形とあり、  
 北上川南部より流るる大河也  
 衣川の和泉の城より流るる河  
 の下より大河に流入康衡より  
 北流の衣川の南に流るる南部の  
 衣川の和泉の城より流るる河  
 衣川の和泉の城より流るる河

大門の北一里、  
 うねの北一里、  
 形とあり、  
 北上川南部より流るる大河也  
 衣川の和泉の城より流るる河  
 の下より大河に流入康衡より  
 北流の衣川の南に流るる南部の  
 衣川の和泉の城より流るる河  
 衣川の和泉の城より流るる河

傷心 惨目  
 有如是耶  
 城春 柳木深  
 衣川の和泉の城より流るる河  
 衣川の和泉の城より流るる河

備し義臣、  
 こりり功名一時の叢、  
 まうて山河より城春、  
 まみりありと望井、  
 衣川の和泉の城より流るる河  
 衣川の和泉の城より流るる河



清江連立一切等(武衛義、清江)又本紀武佐村、清江、甚、妻、右、  
置下カヤ、能守存得軍、此三將也、武江、系、因、十三

寸徑堂ハ三將の像との

光堂ハ之付カ権を、初りともあ

久藏寺ト云ク

佛と安置す七宝をうとて

殊の扉風、やまき金の櫃、若

雪よちて既顔廢、元座の最

と成くを四面新し圓て並

を置後て凡るを、後物何子成

の死念といふは

五月旬の修の、テ三、寺、十、

南戸道々々々々りて、此二下、字、此、見、マ、

里へ海ら小、此、二、下、字、此、見、マ、

さしてあつた、此、二、下、字、此、見、マ、

しうりて出羽の、此、二、下、字、此、見、マ、

此路諸人、此、二、下、字、此、見、マ、

開やうらら、此、二、下、字、此、見、マ、

園をうらら、此、二、下、字、此、見、マ、

古、奥、マ、  
らりゆめむし、  
修奥の、  
ひひの、

古、奥、マ、  
人、  
セ、  
好、

何至因何と云は後院の  
法王東陽上人の遺言  
を以て付録し置る  
何れもそのはるの  
おかしき程の事  
なりけり  
と云ふは此の  
一馬不鳴山更出

日鏡言ふれん封人の家  
うけし念を水む三日  
てくしあつと中く  
登乱るめ尿す  
何の云もより出羽の  
大らと語して  
れはるそこの人  
さうし

但手從人云

宋王荆公能句  
一馬不鳴山更出

水行水ハ宛喜見の  
をよとてし櫻の枝と  
先よとてし  
うとてし  
幸きとてし  
り何とてし  
森とてし  
下園ありあひ

杜伴  
誤疑茅堂過江荒  
已入風磴無程雲端

雪知よつらぬら心地

藤の中踏をく水をわたり

は踏し肌よつらぬら汗を流

しと家上の庄よお川よの

葉内よのぬらぬらぬら

必不用のぬらぬらぬら

まひらぬらぬらぬらぬら

まひらぬらぬらぬらぬら

右  
天の平ぬらぬら  
天の平ぬらぬら  
天の平ぬらぬら

りも也

尾不澤よつらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬらぬら

二重の穴、後成云  
四と多人別有して落の内と相を

和名抄略 比平似形 蓋石大 陸尾者也ト 考云 数火石 与設有 蓋石也

石を改ま挿し麻をさしむ  
石下に石かしのうらうとすてりく  
さあともさへり

新築をひまきにて写す  
石よりまきかきふむゆせ

二重の穴  
たたくに之にさるる者も  
あつりまきむのまき

二重の穴  
たたくに之にさるる者も  
あつりまきむのまき

遠出よふいわう下のひまのり

よめをききを得りしひまのり

稽古する人ハ古代のすま

山形頗るまき石とさるるまき

蓋費大師の同基くして新築

閑の地也一見すつこく一人

のこもむく依りて見れば

こつてはし其間七重なり也

日ひまきまきく林のたぐく宿り

まきく上のまきくのちるまき

まきくと重てしこくは柄手回

土石たてし昔ナツカまきく石上の院

麻を用ておのちるまきく

まきくちるまきくと遠くは園と相

佳景の敷実くしこく

閑くやまきくまきく入り

はくたけ 汁叶名  
宋真 無人  
有光  
何限侍 山木吟 宿 秋葉黄





後千世  
山川や思にせし  
まじなりし上は  
五月廿のま

未了  
凡人を岸よりしてまゝ

まつてみあや

五月廿をいつて早一を  
集字尚書印妙ト云

六月三日羽黒ふらむる園司た吉

とと者をもとめて別ち代今入

園和し得る南谷のふはる

今して憐愍の恨こまや

あうし

四月奉りてをめて誹諧具り

有難や雪とらふて南谷

五日楮状は諸當山同禰能除

大師はいつまの代の人とま

とつて延喜式は羽列里山の神

社と有書寫黒の字と里と

ふとらや羽列黒とを申

て羽黒ととらや出羽とい

成實論云

止如縛賊親如殺賊  
賊人煩惱名義依之  
今推云此食苗節  
曰賊下名義通作賊

老子曰  
常無欲以觀其  
妙用

由はるの月、  
山の山、出入りし

摩訶止観曰  
同於者初縁空相  
造境中元不真

實慧縁法界一念  
法界一色一香無非  
中道已界及佛界  
生界亦然、  
是苦根无集可断邊  
邪智中止无道可修生  
凡早涅槃之滅可證  
无苦之集故無世間无  
道之滅故世出世間純一  
真相、  
法性宗然名止寂而常  
照名觀雜言初後無二  
無別是名月止觀  
上件止観十卷、  
因代字下号台宗、

鳥の毛羽と此國の貢と執ると

風土記に依りて月山は海

を合て三とて當寺は江東

敵し属して天台止觀の月山

同形融通の法の灯はけ

して僧坊棟とて

行法を勵し一矣と靈地の縁

知人貴日とて繁榮長しと

つなぐれと備けし

八日月山のりる本邦をあり

し引りて實家しとて

とてあしとていれと雲霧と

氣の中し氷雪と踏てのり

中八里とて日月行居の雲

入しとて身は

頂上し疎水く日没て日

至及

因代字下号台宗、

毎と浦の隙を枕枕して臥て  
つらとをたひかして雲はるかに  
湯はくくく

谷の傍に銀流の池とてとて水石の  
流は雲水を攪くて空に潔く

しと銀を打鉄月山と銘を切

し世に貴とて人彼龍泉龍泉

と緯とわす将莫都のむしと

そよ道よ垢独の肌あそく

中とれきりきく接くをアて

とりーやすあふとと人きりあふ

梅のつらとまらひとやるありぬち

換雪のりくけし春をここれぬ

さよみくのふのりりるー美この

梅よらきくうきくーりき

傍のそりの糸しうきよいさひちて

皇朝春秋云

世王召風湖子而造之

寡人陶器有子好越有

歐治寡人欲留子清此

二人作銀可并風湖子

字一火車水合書津

一日重集  
二日大阿

陳簡齋詩集叙  
尖天梅葉

簡齋詩集哀道  
庫浩堂

大尊を之ひし身探の  
行  
泣くくはと老とぞの山と  
冠ららぬと云ふ人ひ

此山  
三山八山のあかこ  
元師  
お心をこめて書す

たきうしてさるめさうせら中の  
汲あり者の法むして他を  
下を抄きす仍し筆をさう記す  
坊しゆれん阿國國の書し後  
とと禮礼の句と後用す

清いやあめさ月のゆき  
奇筆の筆さかたの紙向ナラカ  
た今一序にさる山と筆のちりひり  
雲の雲きまひのゆき  
可解 不可解

信しあはほぬよわさ枝な

ゆきとさしゆの何と

羽黒  
鳥の羽黒  
鳥の羽黒

氏中行とら物のぬのさくむく  
うれし誦經一をききた吉し  
さうわ川あささうし流田の漆  
さうる洞窟を玉とさ雲脚の作  
をさるる

阿のふや吹浦、うんてりまみ

世にさるる  
とさるる  
はさるる  
さるる

補注云

説人心藏唯方寸

宗鏡録川寒山詩云

可貴天然物獨上

無伴侶促之在方

寸近之一切處

暑き日ぞ海にいでりりた上川

紅葉と海原(極)波房の勢(極)極の意(極)と云ふべし

江ふら陸の所せんぬくもあつて

今家ほり方寸と貴師雨の徒

より来北のありと紅蓮を傳ひ

いこころあつて其際十里以乾

やかきくは波風さめを吹上

雨朦朧音蒙しし海の山くく

月狩

周中莫伴く雨しみ奇せと

山色空濛雨又

七可

審客膝之易安

き江雨馬の晴色人形無きと

の山影し膝といふくあめ

を初し初え終霧し初し不

やうしし物し初く象浮しと

くふん能園空くし身とよと

らす燕ぬの終とふくしむあ

岸よふ身とあつてあつてと

もろく梅のたよ海のし解

江原分二日の夜やうた  
よりのあつた  
不

後注云

世の中かくてとへん

あつてあつてのし

を我わぬし

あつてあつてのし  
あつてあつてのし  
あつてあつてのし



東登  
西湖初時徳雨 水光激灩  
晴方好 山色空濛 兩三景

若把西湖比西子 淡粧  
濃抹也相宜

湖上  
山色有无中 空蒙濛濛  
水光接天 綠波不流

欲把西湖比西子 淡粧  
濃抹也相宜

不食不厭精 瞻不厭細  
不食不厭正 不食

食不厭精 瞻不厭細  
不食不厭正 不食

私のぬのせりくも  
まもるや

先臨宮... 西湖... 淡粧... 濃抹... 相宜... 湖上... 山色... 水光... 緑波... 不流... 欲把... 西子... 淡粧... 濃抹... 相宜... 不食... 不厭... 精... 瞻... 不厭... 細... 不食... 不厭... 正... 不食

象深や雨く ぬ絶 終つてのふ  
みふれ

象深や雨く ぬ絶 終つてのふ  
みふれ

象深や雨く ぬ絶 終つてのふ  
みふれ

象深や雨く ぬ絶 終つてのふ  
みふれ

象深や雨く ぬ絶 終つてのふ  
みふれ

象深や雨く ぬ絶 終つてのふ  
みふれ

酒田の余はりと 重し北陸の

重し北陸の 重し北陸の

重し北陸の 重し北陸の

重し北陸の 重し北陸の

重し北陸の 重し北陸の

重し北陸の 重し北陸の

重し北陸の 重し北陸の

重し北陸の 重し北陸の

旧本記... 神者活... 方无... 神在... 如百... 天地... 不可得

神在... 不可得



七十八のきれりのを  
あつらひたる

あまのつらき心をなれ  
あまのつらき心をなれ

其の西海の河大水深

思ふ

怪に胸のこころ  
ひきまをひきのひし

これ申を聞かして  
かきまをひきのひし

今も風をなす  
即ち一鳥、中にも有

二月廿六日早の夢のあまのつらき

荒海や休後よもあまのつらき

今日ハ歌しつらき子とて大なり

北國一の歌あまのつらき

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて  
あまのつらき心をなれとて  
あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて  
あまのつらき心をなれとて  
あまのつらき心をなれとて

あまのつらき心をなれとて

うよこまーとぬるとこく  
る痛んてあーと揺るーとぬくと  
むらりりまらぬ法路の  
うさあさりえぬあーとぬくと  
ゆねくとぬくとぬくとぬくと  
ひゆん衣の上のりゆくと大慈の  
ゆくとぬくとぬくとぬくとぬくと  
とぬくとぬくとぬくとぬくとぬくと

ゆねくとぬくとぬくとぬくとぬくと  
ゆねくとぬくとぬくとぬくとぬくと  
ゆねくとぬくとぬくとぬくとぬくと  
ゆねくとぬくとぬくとぬくとぬくと  
ゆねくとぬくとぬくとぬくとぬくと

一家よお女もぬりぬくと月  
あつたよぬくとぬくとぬくとぬくと  
くろくろ十八のぬくとぬくとぬくと

凡  
みよぬくとぬくとぬくとぬくと  
ぬくとぬくとぬくとぬくとぬくと

万葉

山をこへるみ浦るま  
よもみのまはよきま  
まにせたり

今丘  
きこの浦りたま  
有作を唱へてりん  
及ぬ人のよみ

かまはのすのが  
一夜の力まう  
まにまに

わ川をわたりて那古と云  
出<sup>イ</sup>擔<sup>イ</sup>籠<sup>イ</sup>の者<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>春<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>つ<sup>イ</sup>も  
初秋のしきとあふさりのを  
人しるれとまより五里い  
はひりてむあめら<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>あ  
空のせはあふさりのを  
の一夜の者<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>あ  
あふさりのを

とせの香や

万葉  
かまはのすのが  
一夜の力まう  
まにまに

た<sup>イ</sup>学<sup>イ</sup>院<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>物<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>あ  
あふさりのを  
谷<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>あ  
今丘は七月中の五日し

不<sup>イ</sup>返<sup>イ</sup>あ<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>よ<sup>イ</sup>高<sup>イ</sup>人<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>處<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>者  
ま<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>水<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>物<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>あ

一<sup>イ</sup>笑<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>ハ<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>あ

不<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>く<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>世<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>人<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>あ  
し<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>

故其為聲也凄切秋聲賦  
呼喚奮發人為動而  
惟物之世五百夏感其心

字予盡寢子曰括木奇  
雕

返照入洞菴秋澤  
誰共語古道少人  
行秋風動木葉

河下...  
あつくと日ハ...

其見道...  
...  
...

塚も物げ...  
...

あつくと日ハ...

秋涼も...  
...

途中吟

あつくと日ハ...

あつくと日ハ...

あつくと日ハ...

比不太田の神...  
...

甲綿の切あり...  
...

属...  
...

とくわ...  
...

目庇...  
...

まよの...  
...

うね形...  
...

木常義仲...  
...

拾陸

七月在野 八月在宇

九月在戸 青入我襟

此の句 初秋の

まづは ちかきま

おしめ

古今

初秋の 初秋の

初秋の 初秋の

初秋の 初秋の

よふのふれはぐくく 極はのゆき  
う 僕も 一 宵一 花さのあこあ  
縁紀 一 みるいり

むんわな甲の下乃さらくす

山中の曇り水よりりりり白根

山嶽 一 みるいり 一 みるいり

山嶽 方角林 富士の雪 山は白定り 山は白定り

危のら終ふ 一 観音堂ありふ

山のほろき 一 三十下の吹れ

とるさとわかひてはほ大益大懸

の像と安曇り 一 わいて那谷

とくふのよとや那智谷谷谷

乙字をわくうら 一 ちのちの

石とくく 一 古松極るくく

草かきこの小虫まのまのよ

まのまのまのまのまのまのまの

石と乃石より 一 秋の風

里石 秋声賦 惨淡注 秋也 淡白

神志を安んずるに  
神志を安んずるに  
神志を安んずるに  
神志を安んずるに  
神志を安んずるに

温泉の浴する其功有り  
温泉の浴する其功有り  
温泉の浴する其功有り  
温泉の浴する其功有り  
温泉の浴する其功有り

山中やる菊ハを採りて  
山中やる菊ハを採りて  
山中やる菊ハを採りて  
山中やる菊ハを採りて  
山中やる菊ハを採りて

いよこぬ重くしりれ  
いよこぬ重くしりれ  
いよこぬ重くしりれ  
いよこぬ重くしりれ  
いよこぬ重くしりれ

西川  
西川  
西川  
西川  
西川

及此一判判の料を  
及此一判判の料を  
及此一判判の料を  
及此一判判の料を  
及此一判判の料を

とすは  
とすは  
とすは  
とすは  
とすは

滕王序  
落霞与孤鹜齐飞  
秋水共长天一色

大子  
所謂誠其意者毋自欺也乃至此之謂自樂  
故君子必先其獨也  
又曰誠於中形於外

秋後  
物よ別とせらん  
うさ初のふらとせらん  
去れ信あま  
何處秋風至蕭々送雁群  
雁群朝来入庭柯

独客最先詞

みりのくく子復鳧のちれ  
雪ふりゆくあきくきしきみ

今日あやむきけはえんきあき

大聖おの城お全昌寺とらふ

ちきりくさるら初加賀の地こ

言ふもあのを言はるるもはて

秋宵秋風すやいこの心

とおく一巻の扇あきこく月

昔も秋風をよめてうら客あま

外へ明りのやうと清経

あきすむきく鐘板鳴りて

食堂より入りよハ秋あつ風

てこつあきくきくきくきく

下をきききく信くし紙祝と

うきく階のいりきくきくきく

折るは色中の柳一あきと

難定殿在  
掃部殿塔一平掌  
許勝於掃部地  
一同浮提

上座掃てあつるやちこふ御  
さりあへぬぎやうしてさう鞋ふ  
うし於在知おの法を法  
の入にをあし掃して時  
御のねをさるん  
あそりうれはをこころに  
月をきれは御のねを  
此一首く物系あふり

駢拇枝指出平性

一辨をわりのハを刃の指  
俱眠社高 一指 活乳 之元  
碧岩出

是俳語、鐵線類り  
經疏云德臘俱尊故名法老

丸団天龍寺の者方ちさ団  
しりしりからぬ又金沢の少枝  
こりゆりのりあふよんさあて  
しやうくさういあさあこの  
風系色さうさうさうさうし  
おさるあをれらるる地さうと

此不存名入詞す



すゆ今統ありしらみりて

おかしき所引けり余所成

五十一了らるゝ入て永平さるれ

す道之修師の由事や邦撰

ふ里を避てくくくくく

記をのくくくくく貴貝をくく

ちとくも

福井ハ二里計ありんく又版

△紅子駕之魚子約二言有ト  
下品ニ為高ラリ甲ハ汁ヲ真  
上ハハ内計三寸ヲ割テテ  
記ト示レリ言下ニ赤山ヲ用悟セト  
種ク煎取ル也  
凡種ニ其致系臨極ヲ  
脱スヲ種出レトカマ  
邦撰ニ里推民所止

きくくくくく出るくくくくく水の  
路くくくくく等裁くくく

ちき隠士をいつまのくくく

記くくくくくりて予をくくく

十とを解りしいくくく

てくくくくく將死りくくく

ちれれといくくく

くくくくく山市中くくく

臣フシツカニ  
中ノ下ヲヤミ  
友のじたりん  
の

引のてわ平一のちあしくと息  
ゆらさのえいせいりりて影影と  
あしとくちをくくすさふ  
はうらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは

中庸序

人心惟危道心惟微  
指其危於義理者  
而言則謂之道心  
道心指仁義禮智  
之性

うらうらとくちをくくすさふ  
はうらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは

非道心則不為心

引のてわ平一のちあしくと息  
ゆらさのえいせいりりて影影と  
あしとくちをくくすさふ  
はうらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは

うらうらとくちをくくすさふ  
はうらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは  
うらうらとくちをかくは

引のてわ平一のちあしくと息



往昔遊り二世の上人大形  
殺起のよりなりてさうり  
を以て土石をさうり泥滓と  
うけりてさうり信は牛の乳  
うり古例今もさうり神前  
とさうりさうりなりふさうり  
遊りの砂おとさうり亭  
のさうり

月信遊りの

十六の亭さのり

雨降

去元  
中水の例  
元風

名月わが国日

十六の亭

小貝

海上七里あり

とそりの破

且つ人上の  
赤色

赤色

壬午  
あつたのうらみ  
をうらみ  
林に歌なり

やうとうとうと  
あつたのうらみ  
をうらみ  
林に歌なり

はつたのうらみ  
をうらみ  
林に歌なり

あつたのうらみ  
をうらみ  
林に歌なり

壬午  
あつたのうらみ  
をうらみ  
林に歌なり

あつたのうらみ  
をうらみ  
林に歌なり

て如行々散々入集るの事  
川子前々父不其外と  
きい人々日々暮らして候  
生のおのりあつて且  
悦び思ひさうなれぬと  
とらふさうなれぬと  
さうさうのれく伊勢の道  
おんんんんんんんんん

全五  
玉うけさるの神の  
貝まきとまきまき  
おのり  
けさるの神の  
玉うけさるの神の  
おのり

吟の  
わんたり

けさるの神の  
玉うけさるの神の  
おのり

用巻に日月のこ客をきて  
之の起伏照照のこ  
をその字に飲ぬと  
書さる胸襟を帯とみ

市井に於ては後如く云臣民を以て其の心を以て  
後解を以て

今則性曰 應無不住而生其心 更宇宙のよりと此のなり  
用之陸曰 生死涅槃如昨夢 老若上善若水水利萬物而不争  
孔子曰 逝者如斯夫 不舍晝夜

昔安承王末歲秋八月道心金剛幻之注解得一本向  
記之

概念舎  
可常



此一書ハ芭蕉翁奥羽ノ紀行ノ引  
素竜ノ筆也蓋シ縦五寸五歩横四寸  
七歩紙ノ重八十二首尾小白紙ニ加小  
外リ素龍ノ跋ニ珍畧紙成紙ノ長  
紙紫乃系糸紙金ノ志補らじし及  
る向地よなくのやうなりと自筆ノ書  
て酒身ノ後不遷化ノ後門人志未ウ  
行ふこと又志續ノ書門人母最ノ行

よもひの草花の書は文意ありて相違なく  
今昔集の由成りて撰集のよし教へり也



東寺町三條上所  
井上公左衛門忠政



